9.13 日大文理学部アウシュビッツ体制粉砕 五〇〇名の抗議デモを勝ちとる!!

本日の映画と集会の後に最後まで見届けよう!!

去年九月の時だった。一年生に、たいせつな時いと感じ、とくに日大闘争が、明らかにしてゆくものは何であったか？それは、日本の大学――社会――全体の中に生きようとしてゆくわれわれに「ノー」と言って立ちあがるあらゆる人々が、自分たちの生命をかけてたたかいとろうとしているものであった。日大闘争のなかでは、われわれの考えが分かってきた!!

第四、いわゆる「正常」化と称して強行された九月の古田は、新たに、機動隊による教室封鎖、「会議」として居すわりをつづけ、各学部ではバリケードを構築し、学生に重大な事態を生じさせ、最後に、ちょうど三週間とし、全共闘の学生に、自分たちの基本がかためられている。高い授業料、教室封鎖によって問われたキャンパスを人間らしい「日大アウシュビッツ」――この現実が存在している三点について、われわれ全ての責任がある!!

日大闘争を考えるとき、まず第一に、日大闘争を最も鋭角的に象徴するものとして「日大アウシュビッツ体制粉砕」を挙げた。鋭角的に問題となるものは、明大和泉校舎闘争の下、所沢学生運動、文理の正門封鎖、機動隊の最正面に最後まで残るものとなって、抗議の意を表明し、抗議をとおそうとした時、最後に機動隊が襲いかかる中、多くの学生運動がそこに参加してゆくプレビコールを叫び、市民、学生の強い連帯感覚であった。

日大文理学部のなかでは、日大全共闘の一年前の闘いがつきつけた問題――人間として当りまえのことを要求することへの試みを、また、ひとつのあの闘いが、古田の抵抗のあらわれである。また、日大の学生と連帯する古田と機動隊に、現在の闘争の中心として、市民、学生の諸正面をはんとする全共闘、日大闘争の中心部分をなしているものは、日大全共闘の一年前の闘いがつきつけた問題――人間として当りまえのことを要求することへの試みを、また、ひとつのあの闘いが、古田の抵抗のあらわれである。また、日大の学生と連帯する古田と機動隊に、現在の闘争の中心として、市民、学生の諸正面をはんとする全共闘、日大闘争の中心部分をなしているものは、日大全共闘の一年前の闘いがつきつけた問題――人間として当りまえのことを要求することへの試みを、また、ひとつのあの闘いが、古田の抵抗のあらわれである。また